

Road to the 150th



同志社創立150周年記念座談会 「同志社の教育理念を語る」

同志社創立150周年を迎えるにあたり、教育理念の3本柱であるキリスト教主義、自由主義、国際主義の解釈と今後の教育への応用について議論する座談会が開催されました。同志社大学学長の小原克博氏、同志社女子大学学長の小崎眞氏、そして元同志社大学神学部教授の本井康博氏が、それぞれの視点から次世代への課題を語り合いました。

(中央写真 左から)

本井 康博氏 元同志社大学 神学部教授 / 小原 克博氏 同志社大学 学長 / 小崎 眞氏 同志社女子大学 学長

Road to the 150th とは

「Road to the 150th」は、同志社創立150周年を記念して企画・実施される様々な事業をピックアップして、皆様にお伝えしていく同志社未来創造プロジェクト発行の広報メディアです。2025年11月29日に迎える150周年という節目を、同志社の建学の理念と共に歩んだ軌跡を振り返り、未来に向けた一歩を踏み出す機会とするべく、同志社と関わるすべての人が、同志社の過去、現在、未来についてあらためて考えるきっかけとなることを目指して作成しています。

「同志社の教育理念を語る」

教育理念 — キリスト教主義・自由主義(リベラル・アーツ)・国際主義

——150周年を迎える今、教育理念を語る意義について教えてください。

本井氏 150周年を迎える今、100周年と比べても、学部、学校、組織がずいぶんと増えました。大学だけを見ても、私たちが学生だった時の6学部が今は14学部になりました。つまり、この50年で組織が巨大化しました。組織が大きくなることは喜ばしいですが、創立理念も拡散しやすい。それを要としてまとめる教育理念の再確認こそ150周年を迎える私たちの課題です。

小原学長 今の教育理念であるキリスト教主義、国際主義、自由主義は125周年の直前くらいに、セットになって打ち出されました。当時の方々が考えた理念のまとめ方を今も大切にしていますが、それぞれの時代において理念を確認し続ける必要があります。この25年間は3つの理念に基づいてきましたが、固定化する必要はありません。誰か偉い人が考えたものだからという姿勢では、他人事になってしまいます。理念を偶像化するのではなく、我々の時代に何が必要なかを新鮮な思いで考えることによって、理念に命を吹き込むことができます。

小崎学長 同志社女子大学の教育理念では、自由主義をリベラル・アーツとしています。

その理念を尊重したいと考えています。特に女子教育は戦後の新体制により女子中学、高等学校と女子大学に分かれ転換期を迎え、教育システムも変化してきた良さがあります。一方で、キリスト教主義に基づく礼拝を続けているなど、継承している文化もあります。これまでは規模が小さかったからこそ、その都度議論を重ねて進めてきましたが、同志社女子大学はこの25年で6学部11学科に広がり状況が変化してきています。多種多様な学びの中でこそ、原点の教育理念を確認することに意義があると考えます。

——設立以来ずっと変わらない同志社の良さとは？

本井氏 三つの教育理念の中でキリスト教主義と自由主義は一貫してきました。これに加えて女子教育も一貫しています。新島をはじめ初期の宣教師たちが女子教育を大事にしてきたことが顕著です。

小崎学長 世の中の大きな流れに抗うという思想が同志社の中には脈々とあると思います。短絡的な評価をせずに長い目で学生を育てる文化がありますね。

小原学長 新島襄の言葉や生き様を変わることなく大事にしてきました。視点を変えるこ

とによって、同じ言葉からも多様な意味を取り出すことができます。新島の挑戦的な生き様は、今なお、多くの刺激を与えてくれますし、困難な課題に向き合うときの励まし力となります。

——新島襄の言葉にはどんな魅力があるのでしょうか？

小原学長 新島の言葉には人の心を動かす力があります。私たちが繰り返し使うような新島の言葉に新たな光を当てるだけでなく、私たちの足元に埋もれているお宝級の言葉を掘り出していくことも150周年にはふさわしいことでしょう。理念を固定化せずに生きたものにするためにも、新島の言葉をつかみ取って自分のものにする作業が必要です。

小崎学長 私自身が新島を学んで思うのは、彼の言葉は多数の聴衆者に向けて語っているのではなく、手紙などによる対話だということです。手紙は一对一の対話性があり、読み手の状況によってどう届くかの解釈が変わる。その文脈も尊重しながら読んでいくと、言葉に広がりや生まれます。新島の魅力はそこにあります。

本井氏 新島は一对一の対話を重視し、広がりを持たないことを理解していました。

組織が大きくなるにつれ、
要としての教育理念が重要。



本井 康博氏 元同志社大学 神学部教授

理念を固定化するのではなく、 時代の中で 考え続けることが必要。

小原 克博氏 同志社大学 学長



メジャーに流れない、あえてマイナーであり続けるんですね。一人の心を一人ずつ裏返しにしていくことで、初めて全国民の気持ちが変わるんだという信念を感じます。時間はかかるのですが、面と向かっての形で、一対一の経験を新島から受けた人は、彼の良さを理解していますから。

小原学長 メジャーになりたいがために、魂を捨てて時代に迎合するみたいなことは、同志社はやってはいけない。自らのユニークさを失わず、世界の潮流にも抗していけるような、いつの時代も挑戦者であることが新島の精神につながるのだと思います。

——自由主義をどう解釈し進めるべきでしょうか？

本井氏 自由主義は私立学校、特にキリスト教主義学校の基本です。新島襄はボストンを中心にニューイングランドで自由人教育を受け、その理念を日本に移植し、再現しようとしました。新島は「政府の奴隸」（臣民）にはならず、フラットな人間関係を重視し、「先生」や「校長」と呼ばれることを自ら拒みました。そのため男女の関係を始め全ての人々が対等であることを尊重する姿勢を貫きました。こうした自由主義・独立自治の精神が、新島の教育理念の根幹となっています。

小原学長 自由や自由主義という言葉は多義的なので、文脈に即した厳密な使い方が必要です。新島は「真誠の自由」という言葉を遺言に残しています。ただの自由、自分勝手な自由ではなく、真誠の自由。だからこそ、私たちは自由の中身を吟味する必要

がありますし、自由主義の意味を深く考えることが重要です。同じ言葉でも、他の大学が掲げる自由主義と、同志社の自由主義は同じなのか、違うのか、そこを私たちは意識し、その違いを言語化しなければならないと思います。

本井氏 新島襄はキリスト教主義教育を定義して「知徳併行主義」と言っています。「頭の教育」だけでなく、「心育」すなわち「心（魂）の教育」を合わせて行なうことを重視しました。このことは21世紀の今日でもますます重要です。

——この時代に、キリスト教主義をどう捉えるべきでしょうか？

小崎学長 自由主義とも合わせて考えた時、新島はキリスト教教育ではなくキリスト教主義を大切にしていました。教育ではなく主義。つまり、キリスト教を絶対化して、教育に使ってしまうことには抗っていかないといいないと思います。その権威や正しさから解放される、そういうリベラル性が必要ではないでしょうか。キリスト教という言葉掲げるとき、その正しさに立脚した人を権威化するのではなく、その前に自分たちがいかに不完全であるか、弱いものであるかに目覚め、出会っていかないと新島の大事にした愛という言葉も働いてきません。自分とは異なる視点を受け入れる姿勢が求められます。

——グローバリズムが進む中、同志社の国際主義とは？

小原学長 新島襄は国際主義という言葉

一度も使いませんでした。新島にとって、国際的な感覚を持つということは当たり前のことでした。当時の同志社は英語で授業をしていて、宣教師もたくさんいる、国際感覚を養う最先端の場所でしたから。一方で、新島は国際主義に通ずるような言葉をいくつか残しています。「愛人論」という演説の中で新島は、他国を蔑視する偏狭な愛国者が増えていることを憂い、国を超えて世界の一人ひとりを愛することの重要性を説いています。ここでは「人ひとり」に注ぐ眼差しに支えられた新島の間人観と、国際社会を視野に入れた彼の世界観とが見事に調和しています。まさに今の時代、それぞれの国の価値観の違いが引き金となって、戦争や紛争が起こっていますが、そうした様は今も昔も変わりません。その中で、一人ひとりを愛することができますか、という新島の問いは、今も投げかけられているのであって、その問いに答える同志社でなければならないと思います。それが他大学と違う国際主義を示すことにもつながりますね。

本井氏 新島の愛国は愛人であり、全ての国民を隣人愛で愛することが重要です。帝国主義的な他者から奪い取る教育ではなく、与える教育が新島の国際主義です。

小原学長 同志社の国際主義は隣人愛を基盤とし、勝ち組思考ではありません。自分の成功だけを考える国際主義ではなく、他者に目を向けることが重要です。

——同志社の教育理念が、今後の社会とどう合致していくのでしょうか？

小崎学長 同志社女子大学は2026年に150周年を迎えます。そこで女子大学のビジョンを「21世紀社会を女性の視点で『改良』できる人物の育成」と掲げています。キーワードとなっている改良という言葉は、新島が当時の女性解放運動のリーダーである佐々城豊壽との対話で伝えたものです。新島は佐々城に対して、女性たちに人権を訴えるよう求め、社会の不正や不義に対して、声を上げる慷慨心を持つことが重要だと訴えました。同志社女子大学のリベラル・アーツ教育もこの理念に基づいており、固定観念からの解放を目指しています。

小原学長 今、SDGsへの取り組み等が求められていますが、これらは社会が向くべき方向を示しています。大学としても対応しなければなりません。我々もSDGsに取り組んでいますが、まだ十分ではありません。社会課題や世界の困難に向き合う姿勢が重要です。大学の働きには教育、研究、社会貢献の三本柱があり、教育や研究の成果を社会に還元することが求められています。これにより、大学が社会改良のハブとなるのです。大学単体では限界があるため、企業や行政との連携が不可欠です。産官学連携を強化し、企業の多様なネットワークと中立的な大学の教育研究基盤を組み合わせることで、新しい可能性が生まれるでしょう。大学の知的リソースを広く社会に還元し、現代の社会課題に対処していきます。実践力と課題解決力を持った同志社であり続けることが重要です。

——次の50年へ向けて同志社はどのようなビジョンを持って進むべきでしょうか？

本井氏 基本的には原点である創立者の新島襄の「志」（教育理念）を継承、発展させることです。ただ「死人に口なし」ですので、誰かが彼の夢や理想を代弁し、彼がやりたかったこと、やれなかったことをまずは繰り返して伝えることから始める必要があります。私的には三大教育理念に加えて、「人格主義」を強調すべきだと考えています。

小崎学長 特に女性教育という面では、まだまだジェンダーギャップが厳しい状況ですし、国際社会の中で女性教育として何が望ましいのかを常に考えていかなければなりません。一方で、先輩たちのロールモデルを学ぶことも重要です。個別の対話や出会いを通じて、同志社教育がどうあるべきかを再確認する必要があります。卒業生とのつながりはこれから非常に重要で、そのネットワークやコミュニティの中で積み重ねられる言葉を、それぞれの場でどう生かされているかを、収集していくことも大切だと思います。同志社女子大学も同志社大学も、いろいろな可能性があり、頑張らないといけない点がたくさんありますが、そこで学んだことを社会で生かしている卒業生たちが増えていること自体も素敵です。新島が聖書を教えることを断られた時の「瓶の中のどんぐり」という言葉は、制限の中こそ秘められた可能性を確信するという意味ですが、私たちの描いている世界を超えて

いくような知恵を、在学生や卒業生などの今後の世代に託したいと思っています。

小原学長 150周年を迎え、50年先を見渡すことは、新島が「教育は200年の事業である」と述べたことから大切です。新島は長期的な視点を持っていましたが、現在の我々は視野が狭くなりがちです。50年先を考えることは重要ですが、未来予測をする必要はありません。今年生まれた赤ちゃんが中年になる、そんな50年先の社会で、彼ら・彼女らが望ましい環境で育ち、生活するために、今何をやる必要があるかを考えることはできます。将来の子供たちが食やエネルギーに困窮したり、紛争の危機におびえたりすることのない社会を作るのは私たちの責任です。国の違いを超えて世界の一人ひとりを愛する、という新島が投げかけた課題は、解決されるどころか、悪化しているかもしれません。簡単には解決しない大きな課題を認識し、50年先の社会で人々が安心して暮らし、学ぶことができるために今何をすべきかを考えることが重要です。同志社大学のビジョンとして、私は「同志社ルネサンス」という言葉を掲げています。新島や同志社の理念に立ち返り、西洋史におけるルネサンスのように、オリジンと新たな出会いを果たすことによって、人や社会をトランスフォームする「知の爆発」を引き起こすことができると信じています。同志社が社会や世界を先導し、人類に新たな道を示すハブになることを目指し、次の50年に向かって進んでいきたいと思っています。

自分とは異なる視点を、
いかに受け入れられるか。



小崎 眞氏 同志社女子大学 学長